ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ピアノ協奏曲 第17番 ト長調 KV453
Piano Concerto No.17 in G major, KV453

1 オープニング
Opening

2 第1楽章 アレグロ [12:32]
Ⅰ.Allegro

3 第2楽章 アンダンテ [12:34]
Ⅱ.Andante

4 第3楽章 アレグレット フィナーレ プレスト [07:55]
Ⅲ.Allegretto Finale Presto

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 Wiener Philharmoniker
ピアノと指揮: レナード・バーンスタイン Pianist and Conductor : Leonard Bernstein
監督: ハンフリー・バートン Directed by Humphrey Burton
収録: 1981年 ウィーン、ムジークフェラインザール Musikvereinssaal Wien 1981

●ピアニスト・バーンスタイン〜モーツァルトを中心に

山田 治生

バーンスタインにとって最も身近な楽器はピアノだった。音楽との出会いのきっかけが10歳のときに伯母から譲り受けたピアノであり、その後、レッスンに通い、専門的な教育も受けた。そして15歳で学生オーケストラ相手にグリーグのピアノ協奏曲を弾き、1937年にはマサチューセッツ州交響楽団とラヴェルのピアノ協奏曲（世界初演から5年しかた経っていない現代曲だった）を演奏した。つまりバーンスタインは、最初、ピアニストとして頭角を現したのであった。彼は、ピアノのほか、作曲も手掛けていたが、その後、ミトロプーロスとの出会いがきっかけで指揮者を志し、フィラデルフィアのカーティス音楽院に入学。そこでフリッツ・ライナーに指揮を学び、同時に厳格なイザベル・ヴェンゲローヴァにピアノを師事した。

若い頃のバーンスタインは、ピアニスト（あるいはコンポーザー・ピアニスト）としての活躍が目立っていた。例えば、ヨーロッパに渡っての初めてのレコーディングは、1946年、フィルハーモニア管弦楽団との弾き振りでのラヴェルのピアノ協奏曲だった。

バーンスタインは、機会があれば、弾き振りを試みた。ニューヨーク・フィルの音楽監督に就任した1958年には彼らとショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第2番を弾き振りで録音し、1966年のウィーン・フィルとデビュー・アルバムではモーツァルトのピアノ協奏曲第15番を共演した。

バーンスタインのコンチェルトのレパートリーはそれらのほかに、モーツァルトの第17番、第25番、ベートーヴェンの第1番、ガーシュウィンの《ラプソディ・イン・ブルー》などがあった。彼はこれらをすべて弾き振りで録音している。しかし、近年のアルゲリッチと同様に、バーンスタインは一人きりでのピアノ演奏を好まず、ピアノ・ソナタの録音はコープランドのもの（1947年録音）があるくらいだ。

バーンスタインの弾き振りのレパートリーのなかでも、モーツァルトのピアノ協奏曲第15番と第17番は、彼が若い頃から特に愛してきた作品である。バーンスタインはこの2曲を早くも1956年5月にニューヨークでコロンビア交響楽団と録音している。そして前述したように1966年のウィーン・フィル・デビューの演奏会でピアノ協奏曲第15番を弾き振りし、録音も行った。ピアノ協奏曲第17番は1968年のウィーン・フィル定期演奏会出演時に弾き振りしている。

このDVDに収められている1981年10月、ウィーン楽友協会大ホールでのピアノ協奏曲第17番は、以前にCD化されたライヴ録音と同時期のものである。収録当時バーンスタインは63歳であったが、ピアノ協奏曲を弾く映像としては、彼の最も晩年のものに違いない。CDに限って言っても、この演奏以後に、協奏曲的な作品で録音されているのは、1982年のロサンジェルス・フィルとの《ラプソディ・イン・ブルー》があるくらいだ。63歳は指揮者としては若くても、ピアニストとしてはかなりのベテランといえる年齢だ。60歳を越えてもこのような演奏ができるとは、さすが才人バーンスタインというほかない。

弾き振りの場合、ピアノのふたをとって、客席に背を向けて演奏する人もいるが（たとえば、バレンボイム）、ここでのバーンスタインはピアノを通常のピアノ協奏曲演奏時と同じ向きに置き、コンサートマスターに背を向ける位置で弾いている。それでも木管楽器を自分の正面に配置するという工夫は行っている。独奏ピアノと木管楽器の絡みの多いこの作品ならではアイデアと言えよう。なお、バーンスタインは、かつてリリースされていた1970年のウィーン・フィルとのベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番の映像でも、コンサートマスターに背を向ける通常のピアノ協奏曲のポジションで弾き振りをしていた。

バーンスタインにとって弾き振りとは、ピアノを弾くことによってオーケストラのメンバーと直接コミュニケートする（音楽をエンジョイする）ことにほかならない。バレンボイムが弾き振りによって、オーケストラから独奏ピアノまで協奏曲のすべてを一人で治めようとしているのとは違って、バーンスタインは、指揮者というよりも、一人のピアニストとして演奏に参加しているように思われる。でもそれはソリストとして活躍するピアニストが自分の独奏を聴かせようとするのとも違う。敢えて言えば、オーケストラのメンバーたちと大きな室内楽を楽しんでいるということだろうか。バーンスタインはオーケストラのメンバーとより深く音楽を共有するために弾き振りを行っていたのだ。

バーンスタインが自分の大好きなモーツァルトのピアノ協奏曲第17番をウィーン・フィルのメンバーと楽しそうに演奏しているのを見ると、200年の歳月を越えて、モーツァルトがうれしそうに自分の協奏曲を披露している姿が目に浮かぶようである。

●モーツァルト：ピアノ協奏曲第 17 番 ト長調 K.453

ピアノ協奏曲第17番ト長調K.453は、同第14番変ホ長調K.449と同様に、モーツァルトの愛弟子のバルバラ・フォン・プロイヤー嬢のために1784年4月に作曲された。バルバラは、ウィーン駐在のザルツブルク宮廷連絡官の娘で、1784年から85年にかけてモーツァルトにピアノと作曲を学んでいた。有能なピアニストであったと伝えられている。初演は、1784年6月13日、プロイヤー家の別荘でバルバラの独奏で行われた。プロイヤーはこの演奏会のためにわざわざオーケストラを雇ったという。そしてこの日、モーツァルトはバルバラと2台のピアノのためのソナタK.488を弾いた。

この作品では、それ以前のピアノ協奏曲と比べて、木管楽器（フルート、オーボエ、ファゴット）の活躍が顕著になっている。

第1楽章:アレグロ。付点のリズムを活かした生き生きとした第1主題で始まる。それに対して滑らかな第2主題は少し翳りを帯びている。最後にカデンツァがある。

第2楽章:アンダンテ。深みのある緩徐楽章。ゆったりとした歌のような旋律が心にしみる。独奏ピアノと木管楽器のやりとりが聴きどころ。この楽章にもカデンツァが用意されている。

第3楽章:アレグレット～フィナーレ、プレスト。主題と5つの変奏に「プレスト」のフィナーレが付く。この協奏曲の作曲直後、モーツァルトが、街角で売られていたムクドリのさえずりにこの楽章の主題を聴き、うれしくなって、そのムクドリを買ったというエピソードが伝えられている。短調に転じた第4変奏が印象的。そして、テンポを速め、陽気なフィナーレで明るく締め括られる。

●レナード・バーンスタイン

指揮者としてだけでなく、作曲家、ピアニスト、教育者、著述家、平和運動家として活躍した「音楽家」。1918年8月25日、米国マサチューセッツ州ローレンスに生まれた。10歳のときに伯母からピアノを譲り受け、音楽の才能を開花させる。ハーヴァード大学時代にミトロプーロスから強い影響を受け、カーティス音楽院でライナーに指揮を師事。40年にはタングルウッドでクーセヴィツキーに学ぶ。

43年8月、ニューヨーク・フィルの副指揮者となり、同年10月に急病のワルターの代役でニューヨーク・フィルにデビュー。センセーショナルな成功を収めた。44年には、ピッツバーグ響で自作の交響曲第1番《エレミア》を初演。45年から48年まではニューヨーク・シティ響の音楽監督を務める。53年にスカラ座デビュー。57年には作曲を担当したミュージカル《ウエスト・サイド・ストーリー》が大ヒットした。

57年、ニューヨーク・フィルの首席指揮者となり、58年から69年まで同フィルの音楽監督を務めた。その間、マーラーの交響曲全集の録音を進める。また、指揮、司会、台本執筆を担当した「ヤング・ピープルズ・コンサート」が大人気を博した。

66年に《ファルスタッフ》を指揮してウィーン国立歌劇場にデビュー。69年にニューヨーク・フィルの音楽監督を退任してからは、フリーの指揮者として、

ウィーン・フィル、イスラエル・フィル、コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、サンタチェチーリア国立アカデミー管、などに客演。79年にはベルリン・フィルを指揮。 作曲家としては、《オン・ザ・タウン》や《キャンディード》などのミュージカル、3つの交響曲のほか、「ミサ曲」やオペラ《静かな場所》などの大作を残す。

教育活動にも熱心に取り組み、タングルウッド音楽祭やシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭で後進の指導にあたるほか、90年夏には札幌でPMFを創始した。

1990年10月14日、ニューヨークの自宅で永眠。